

『業火の姫』

(令和三年改訂版)

作・鶴川里香

終プロジェクト五周年記念公演

平成二十六年二月

日暮里サニーホール

池袋演劇祭参加作品

平成二十七年九月

豊島公会堂

終プロジェクト第十四回本公演

令和三年二月予定

日暮里サニーホール

戦国時代初期

場所は架空(想定は加賀)

「サロメ」を大幅に脚色

Mはダンスナンバー

(登場人物)

沙羅姫……………美しいものしか愛さない

不破芳春……………海見(あまみ)の国の若き領主 沙羅の弟 沙羅に固執

由布子……………芳春の正妻 吉羽の国の姫

糸屋宗佑実は眞木原幸成……………眞砂(まさご)の国の領主

商人に扮して海見の城に入り込んだ

香楠……………天台宗の僧侶 次期天台座主をのぞまれている

定信……………芳春の忠実な家臣 芳春のために沙羅の排除を考える

沙羅の侍女……………定信の急襲に対して、沙羅に盾にされ斬られる

由布子の侍女……………幸成に捕らわれたのち自害

九条長基……………帝からの使い

異国の踊り子たち

芳春の家臣たち

幸成の家臣たち

海賊たち

山寺を訪ねる僧侶たち

埋火……………語り

焰……………語り

1 あの女のせいだ

シルエツトで。

家を焼かれ逃げ惑う人。

火が着き苦しむ人。

影「熱い……」

影「助けてくれ……」

影「田畑を耕し、我らは真面目に暮らしていたのに」

影「あの女のせいだ」

影「あの女のせいだ」

影「同じめにあわせてやる」

暗転

2 海見の港

波の音。カモメの声。

芳春家臣1「船が着いたぞー」

芳春家臣2「橋桁をかけるー」

舞台に明かりが入る。

上手に橋桁替わりの階段。

船を迎え入れる家臣たち。

埋火「京を二分した応仁の乱以降、室町幕府はその力を失い、各地の大名が領地を勝手に支配するようになった」

焰「戦国時代の始まりである」

埋火「未だ織田信長も豊臣秀吉も生まれておらず、各地の大名は日本を統一することもよりも、領土を守り、広げることに力を尽くしている」

焰「ここ海見の国は、豊富な金山と豊かな田畑、そして異国と貿易をするための大きな港を持っていた」

埋火「領主は、普和芳春。聡明で勇気のある領主を家臣は頼り、民は自慢に思っていた」

焰「ある一点をのぞいては……」

家臣、定信が迎える。

定信「芳春様！城内でお待ちとばかり」

芳春「姉上が南蛮船を見たいと申してな」

沙羅、入る。

みんな一斉に頭を下げる。

芳春「今日は天気もよい。姉上と港の様子を見るのも一興であろう。

（船を見て）かの国のものどもはまだか」

定信「橋桁はかけたのですが、なかなか船から下りていらつしやい

ませぬな。おい、見てまいれ」

家臣1「は！」

家臣、船の様子を見に行く。

異国の商人が降りてくると思いきや、現れたのは海賊たちだった。

家臣1「海賊だー！船が乗っ取られたぞ！」

【M1・a「海賊と勝利の女神」】

戦いの用意をしていなかった芳春たちは海賊に押され気味だ。

定信「ここは一時退却だ。芳春様と沙羅様をお守りしろ！」

沙羅「引いてはならぬ！」

【M1・b】

男装の沙羅が刀を抜く。

沙羅「海賊などに引けをとるは、末代までの恥と知れ！命を賭して

戦え！」

芳春たちに勢いがつく。

大勝利。

芳春「戦の備えもない身で、みな、ようやった。姉上のおかげだ！

姉上は勝利の女神ぞ」

定信「いいや！この女は悪神だ」

輪が崩れる。

定信「お覚悟なされ、沙羅殿」

沙羅に刀を振り上げる。

沙羅は隣にいた侍女を盾にして逃れる。

斬られた侍女が倒れる。

動揺する定信をみなが取り押さえる。

芳春「定信！ 気でもふれたか！」

定信「これぞ千載一遇の機会であった。もとより私は腹を切る覚悟にございます。芳春様は優れたお方じゃ、しかし、沙羅様の存在はいつか必ず害をなす。みなも、そう思っているであろう！」
皆、下を向く。

定信「この命をかけてお願い致す！ 沙羅様を遠ざけてください！」

芳春様のために、何卒！」

芳春「(家臣に) 斬れ」

沙羅「お待ちなされ芳春殿、忠義の臣ではないか」

芳春「姉上の命を狙ったのじゃ。許せぬ」

沙羅「ならば、最も重い罰を与えればよい。このものの目を潰せ」

定信の顔を上げさせる。

沙羅「よう見よや。そなたが最後に見る私の姿ぞ。美しいであろう」

大笑いする沙羅。

定信、連れていかれる。

沙羅「このようなこともあるから、城にばかり籠もってはいられぬ。

退屈できぬことよな」

芳春「(家臣たちに) このようない大事は二度と許さぬ。心得おけ！」

頭を下げる家臣たち。

船から洋風のマントを羽織った商人が下りてくる。

宗佑「助かりました。(マントを脱ぎ) お初にお目にかかります。かの国で商いをしております糸屋治平の息子、宗佑と申します。いやあ、このような失態、また父に叱られてしまうなあ。荷は無事でございます。是非、殿様にご覧いただきたい」

波の音。

暗転。

3 祝宴（海見城内）

【M2 異国の女たち】

異国の女たちの妖艶な舞踏。

呆然とする家臣たち。

芳春はまるで興味が無い。

宗佑「（手をたたき）すばらしい！」

芳春「姉上はまだか。様子を見て参れ」

そこに現れる沙羅姫。

貢ぎ物の衣装を纏い、目を見張る美しさ。

思わず立ち上がる芳春。

芳春「姉上！まばゆいばかりじゃ！みなもそう思うであろう！

この日の本中を探しても姉上のようなおなごはおらぬ」

宗佑「衣装をお贈りした甲斐があります」

芳春「姉上、姉上の舞が観たい」

沙羅、笑顔で首をふり、席につく。

宗佑「このように美しい姉君様では、良き縁談の話がたくさんあり
ましよう」

芳春「お若いが、さすが商人だな。どの国と手を組むか興味がおり
りか」

宗佑「いえいえ」

芳春「姉上が望まぬ限り、どこにもやらぬ。姉上は美しさだけでは
ない、知力も抜群。この大国を守るに欠かせぬ」

宗佑「この国はまことに豊でございます。周りの領主が欲しがりま
しょう」

芳春の目が曇る。

芳春「（軽く笑って）国の境、城までの街道、気が抜けぬ毎日よ。

しかし、優れた家臣を配備しておる。軍資金は潤沢じゃ。

(自らに言い聞かせるように) 何も心配はいらぬ。この国は必ず守る。(切り換えて) 珍しき品をたくさん仕入れることができた。糸屋のおかげじゃ」

宗佑「こちらも儲けさせて頂きました。父に大きな顔ができます」

正妻、由布子が侍女達を連れて入る。

宗佑「奥方様でいらっしやいますか。こちらもお美しい」

芳春「おとなしいだけのおなごじゃ。国と国との結びつきの証。

姉上とは比較にならぬ」

由布子は笑顔で挨拶し、席に着く。

袖で騒ぐ声。

『お待ちください！』

芳春「なにごとか」

家臣が飛び込んできて、

家臣「申し訳ございませぬ！比叡山の香楠様が、殿に謁見願いたいと」

家臣たちに止められるのを振り払って、香楠入る。

香楠「無意味に民を苦しめる悪しき姫はどこにおる！」

【M3 悪しき姫にもの申す】

香楠の抗議

芳春「この無礼な男に縄をかけよ」

家臣「なりませぬ。次の天台座主様でいらっしやいます」

芳春「この汚れた男が、誠に比叡山の高僧か？」

家臣「城下では噂になっておりました」

家臣「香楠様は旅を続けながら下々の者にも説法をし、川に橋をかけたたり、訴えを聞いておると」

香楠「民こそが国の宝であろう！罪もない民を家もろとも焼くなど許せぬ悪行！」

沙羅「花見のことか。美しい桜の森を見つたのじゃ。しかし汚ない家が目に入る。火をかけさせたら勝手に家主が巻き込まれただけのこと」

香楠「そんなことのために、人の命を奪ったか！」

芳春「姉上を悪し様に申すな！」

芳春、香楠につかみかかる。

香楠「斬れ！この身は滅んでも魂となりて、この女の悪行を諫めてみせようぞ」

家臣「殿、なりませぬ！」

由布子「（走り寄り）お坊様に乱暴してはなりません！殿にどのような災難が降りかかることか！」

芳春、由布子を払いのける。

侍女が驚いて由布子を助け起こす。

家臣たちが力づくで芳春を止める。

芳春「離せ！もうよい、野に放て。姉上を悪くいう声を耳に入れない」

宗佑「芳春殿、隣国では、民衆が集まり鉞を振り上げて城を囲んだと聞いております。香楠様に扇動され同じようなことが起こらぬとも限りませぬ。しばし城の中に籠めた方が安心かと」

芳春「周りの大名たちばかりか、我が国の民にまでおびえねばならぬとは情けない限りじゃ。香楠を奥に籠めよ」

香楠「普和芳春！そなたの姉は妖魔じゃ、目を覚ませ！」

香楠、連れていかれる。

芳春「宗佑殿も驚かれたであろう。（家臣に）酒を持ってまいれ」
侍女たちが忙しく行き交う。

芳春「すっかり興がそがれた。姉上！舞を見せてくださらぬか」

沙羅、笑顔で首をふる。

沙羅「少し酔ったようじゃ。風にあたってまいろう」

芳春「姉上！」

出て行く沙羅。

納得ができない芳春。
暗転。

4 捕らわれの聖

庭に出る沙羅。

風に乗って読経が聞こえる。

沙羅「良い声じゃ」

声の方に歩き出そうとする。

庭番の家臣たちが止める。

家臣「これより先はどなたもお通しできません」

沙羅「その僧をこれへ」

家臣「それはできません」

沙羅「誰にもものを言うておる」

家臣「沙羅様！」

沙羅「早う！」

仕方なく香楠を連れ出す家臣。

沙羅「退け」

家臣「しかし……」

沙羅「退けや」

家臣たちを追い払う。

沙羅「美しい声じゃのう」

香楠「去れ。そなたに仏の心などわからぬ」

沙羅「経文の中身などどうでもよい。声を聞かせよ」

香楠「罪深き女め」

沙羅「罪？」

香楠「欲望のまま民をないがしろにしている」

笑う、沙羅。

沙羅「それが罪か？僧は経を読む、百姓は米を作る。支配者は支配するのだ」

近づく沙羅。

香楠「近寄るな！そなたからは血の臭いがする」

構わず近づく。

沙羅「海賊の血だ。勝利の匂いだ」

香楠「人の命を無闇に奪うことは勝利ではない」

沙羅「我は勝者じゃ。祝え、美しいその声で経を読め」

沙羅を睨む香楠。

沙羅「瞳も美しいのう」

笑う沙羅。

沙羅「この目が仏の姿を追い、この唇で仏を讃えるか」

手を伸ばし、香楠にふれる。

香楠「さわるな！この身を汚すか」

沙羅「聖か。本当に女に興味がないのか」

香楠「私の心は仏にある」

沙羅「声を聞かせよ」

香楠「けがらわしい女め！」

沙羅「もっと大きな声を出せ。我だけに声を聞かせよ」

【M4 声を聞かせよ】

香楠への興味を増す沙羅。沙羅を遠ざけようとする香楠。

5 香楠の首

芳春「姉上！姉上！」

ふらふらと芳春が入ってくる。

香楠に近づいている沙羅に驚く。

芳春「（家臣に）おまえたち！何をしてやった！」

家臣を一喝し、沙羅と香楠の間に割って入る。

香楠を睨む芳春。

芳春「姉上、私とともにまいろう」

沙羅「嫌じゃ」

芳春「姉上！」

沙羅「あの部屋は暑苦しい」

香楠「この魔性を遠ざけよ。この女は禍だ。国を滅ぼすぞ！城主芳春よ。見識高いそなたがいろいろにされては、国は乱れる一方ぞ」

芳春「姉上を悪く申すな！首を搔つきられたいか！」

香楠「世の乱れを正せるのなら命は惜しまぬ。領民を人と思わぬこの女は、人の上に立つてはならぬ。決して許されぬ」

芳春は刀を抜こうとして止められる。

沙羅「良いことを思いついた。芳春殿、私の舞が見たいか」

芳春「姉上、見せてくれ。今日は海賊とも戦った。この坊主を罰することも出来ぬ。……どの国からも狙われて、酒を飲まねば眠ることも出来ぬ」

【M 5 姉上だけがこの心を癒す】

芳春の苦悩。沙羅が興味を示す香楠への嫉妬。

芳春「姉上、姉上の舞が見たいのじゃ」

沙羅「芳春。そなたのために舞おうではないか。そのかわり、この僧の首を私に」

家臣「なんと！」

家臣「それはなりません」

家臣「香楠様は比叡山の高僧ですぞ。天台宗徒すべてを敵に廻すおつもりか」

家臣「山を敵に廻しても殿のためなら戦います！何も罪のない僧侶を斬っては、どのような厄災がふりかかるか」

家臣「この国に恐ろしい天罰が下ります！」

【M 6 天罰】

家臣たちの恐れ。憂い。芳春への懇願。

芳春「姉上の…、舞が見たい」

沙羅「承知した。香楠も良くみておくがよい。この舞のあと、そなたは私のものになるのだ。何の抵抗の出来ぬ首だけになってな」

沙羅「今宵おりしも十三夜。高き天（そら）には青の月。ふれる明かりは絹の糸。赤い薔薇（そうび）の匂い立つ」

【M 7 沙羅の舞】

沙羅「そなたは私のものだ。その眼も美しい声を放つ唇も、私だけのものだ」

香楠「魂は仏のもとにある」

命じられ、仕方なく、家臣が刀を振り上げる。

6 普和家の最期

宗佑「勝手なことをされては困る」

宗佑が入る。

芳春「何を申すか」

宗佑「比叡とはもめたくないのだ」

どっと軍勢がなだれ込む。

芳春「そなた…」

宗佑、マントを脱ぎ捨てる。

武家の姿。

宗佑、実は幸成「眞砂（まさご）の国、領主、眞木原幸成」

【M 8 幸成の軍勢】

芳春、沙羅が囲まれる。

理解ができない芳春。

沙羅は無表情のままだ。

幸成「案外簡単であつたな、由布子殿」

由布子が入る。

由布子「幸成殿と我が里、吉羽（よしば）の国が手を結ぶことになつたのじゃ」

沙羅「これはしてやられたな、芳春」

家臣の声が遠くからする。

家臣「軍勢が迫っております！ 急ぎ戦の支度を！」

芳春たちが顔を見合わず。

沙羅「城の外も囲まれたか」

芳春は呆然としている。

由布子「芳春様は助けて頂けまするな」

幸成「それは出来ぬ相談だ」

由布子「この国に攻め入つたあとは、芳春様を傘下にし、沙羅を亡き者にする約束ではありませんか」

沙羅はせせら笑う。

沙羅「どうせ今頃は吉羽の城も取り囲んでいるのであろうか」

由布子「嘘じゃ」

沙羅「この男が、そなたに協力するつもりか」

由布子「話しが違う！ なぜ我が故郷を、お父上を裏切るつもりか」

侍女「由布子様、急ぎ大殿様にお知らせを！」

由布子「……」

侍女「由布子様！」

由布子「……もう遅い」

侍女「私の父や兄もお城におります！」

侍女「何のためにこの者たちを城に引き入れたのか！」

由布子の形相が変わる。

由布子「すべてそなたが元凶じゃ！ 芳春殿の心を捕らえて放さぬ、そなたが憎い！ お前さえ、お前さえいなければ！」

【M 9 沙羅さえいなければ】

由布子の沙羅に対する憎悪

由布子「殿！私は沙羅から殿を守りたかったただけなのです！」

芳春は由布子の手を払いのける。

芳春の刀をとり、由布子は自害する。

侍女「姫様！姫様ー！」

芳春は我に返ったように冷静になる。

芳春「城の外も中も敵だらけか……。さていかがしたものかな」

幸成「諦められよ」

芳春「そなたは私を侮っておるようだが、戦は得意なのだ」

幸成「存じておる」

芳春「少なくとも、そなたを無傷にはしておけぬ」

幸成「恐ろしいことよ」

芳春、由布子が突き刺した刀をとる。

芳春「お相手願おうか」

幸成「お断り致す」

芳春軍のものが沙羅を捕らえ、幸成に渡す。

芳春「裏切るか！」

幸成「私の方が悪知恵がきくということだ」

芳春「情けないヤツめ」

幸成「姉上はとんだ嫌われ者らしい。この国の民に、姫を亡き者に

すると言うたら、いくらでも協力してくれたわ」

芳春「黙れ！」

幸成「それでも、愛しい姉上であろう」

脇差しを抜いて、沙羅の顔にあてる。

芳春「何を致すか！」

幸成「これから五つ数えるたびに、姉上殿の顔を切り刻む。その前に腹を切ってもらおうか」

家臣「殿！諦めてはなりませぬ。殿を慕う家臣は大勢おります！」
幸成「ひとつ」

家臣「こらえてくだされ！」

幸成「ふたつ」

芳春「姉上！」

幸成「みつつ」

芳春「やめろー！」

芳春、刀を腹に突き立てる。

家臣「殿ー！」

芳春「姉上から手を離せ。姉上は誰にも渡さぬ。姉上だけは」

崩れ落ちる。

家臣、みなうなだれる。

幸成「誠、姉に狂っておったか」

幸成の家臣「殿！我が軍が城に入りました」

幸成「上々。(裏切った芳春の家臣をみて)そやつを斬れ。いつ裏切るやもしれぬ」

暗転。

7 新しい城主

【M O 新しい城主を迎える】

祝宴

幸成に助け出され、美しい法衣をまとう香楠。

幸成「香楠殿、やはり次期天台座主だな」

側室「たいへんお似合いですわ」

香楠「幸成殿のおかげで命が繋がった。この先は更に仏の道を極めとう存じます」

幸成「城を出ると申すか」

香楠「苦しんでいる民が大勢おりますので」

幸成 「こたびの戦で我らも多くの犠牲を払った。法要せねばならぬ。
是非お願いしたい」

側室 「香楠様の誑経ならば、みな心安うなりますわ」

幸成 「香楠殿に弔ってもらえれば、無念のものも救われよう」
引き立てられる沙羅。

幸成 「これは沙羅殿。この城を私の趣味に変えてみた。いかがでございましょうか」

沙羅 「……」

幸成 「そなたを嫌う民は多い。民衆の前でそなたを火にかけたら、私はこの地で歓迎されよう」

沙羅 「……」

幸成 「気の強い女だ」

顔をよく見る。

幸成 「確かに惜しいな」

周りにいる幸成の女たちが不満そうな顔をする。

幸成 「南蛮船から海賊と戦うそなたを見た。勝利の女神であった」

沙羅 「……」

幸成 「側室にしてやろうか」

沙羅 「おまえごときが、笑わせるな」

幸成 「ほう……。ならば、そなたにふさわしい男とはどんな男だ。
そうだな、沙羅殿が認める男と夫婦になるなら、その命、許さうではないか」

【M二 お前が認める男は誰だ】

幸成の挑発、いらだち

幸成 「期限はひと月だ。楽しみにしておる。(家臣に)それまでは丁寧に扱ってやれ」

家臣に連れられ、沙羅、去る。

側室 「殿！ あんな女すぐに殺してください」

幸成「まあ、待て。あの氣位の高い女が、自分の命惜しさにどんな男に身を任すのか、見てやろうではないか」

側室「まあ、おもしろそう」

転換明かり。

8 集まる男たち

噂を聞いて、沙羅のもとにはひとかどの武将や貴族が城に集まっている。

家臣「信濃守護代、二宮政親（まさちか）様ご子息、二宮親重（ちかしげ）様。能登守護代、遊佐孝幸様ご子息、遊佐孝典様。従五位少納言舟橋有輔様。従五位省大輔高階実邑（さねむら）様」

明かり変わる。

武将「噂は我が国にも届いておる。あの普和芳春が命を賭した美しさだと」

沙羅。入る。

武将「きつい性分だが、それを計りにかけても余りある麗しさだと」

【M12 どうぞ私の妻に】

自己紹介をし、アピールする男たち

幸成「どのお方も、身分も財力もある。沙羅殿。そなたの選ぶ男なら間違いなからう」

幸成と女たち、せせら笑っている。

側室「それとも、わが殿と我らに頭を下げて側室に加わるかの？」

側室「取り澄ましておっても、やはり命は惜しいものよな」

沙羅が近づく、恐れる側室たち。

沙羅「心配無用じゃ」

幸成「まだ時はある。じっくり思案なされよ」

沙羅を残し、みんな去る。

思案する沙羅。

沙羅「この私が認める男……」

明かりが不気味に落ちていく。

暗闇から声がする。

声「なぜ我らに火をかけた」

声「着物が気にいらぬと腕を切られた」

声「鳥を死なせたと首をはねられた」

声「(侍女) 吉羽の国がなくなり、捕らわれた」

声「(侍女) 我らは首をくくった」

声「おまえも黄泉に片足が入っておるぞ」

声「こちらにまいられよ」

声「いっそ楽になればよい」

沙羅を狙う亡霊たち

暗闇の中、沙羅を囲む亡霊たち。

その中心にいる由布子。

由布子「お前さえいなければ」

【M 13 冥府への誘い】

亡霊たちが沙羅を取り囲む

沙羅「うるさい！ 思案中ぞ！」

沙羅に睨まれて、亡霊たちは恐れ消えゆく。

読経が聞こえる。

香楠の声。

ふらりと立ち上がる沙羅。

暗転。

【M 4 聖者の読経】

沙羅「相変わらず良い声だ」

香楠「戦でたくさんの命が奪われた。芳春殿の御霊をそなたも慰めたいであろう」

沙羅「死んだものは慰められぬ」

香楠「死ぬのは身体のみ。御霊は残る」

沙羅「そなたは、天台宗の僧であろう。なぜ比叡に戻らぬ」

香楠「今、山は、朝廷内の派閥争いに巻き込まれておる。仏に仕える身でありながら現世の欲にまみれた輩が何やら企てておる。あのような空気の中では修行はできぬ」

沙羅「そのものが正直なのじゃ」

香楠「室町將軍の力がなくなり、日の本は戦の渦に巻き込まれておる。今こそ仏を求めるべきなのだ」

沙羅「神も仏も、何もくれはせぬ」

香楠「命を粗末にするな。そなたも仏の道に入れ。私が幸成殿に話しをしよう」

沙羅「尼になると命乞いをせよと申すか！この私が？」

香楠「この世の浅ましきを見たであろう。人を欺き、命は軽んじられる。仏の道こそが救いなのだ」

沙羅「くだらぬ」

香楠「罪深いそなたでも、信心致せば、仏に許される時が来よう」
沙羅「私は誰にも支配されない。仏にもな」

暗転。

10 炎の沙羅

沙羅が座っている。

幸成と女たちが入る。

幸成「期日だ。沙羅殿が選ぶ男は誰か。名をあげよ」

沙羅「……」

幸成「夫婦（めおと）となるなら、命が助かるぞ。みな、そなたを欲しておる」

沙羅「……」

幸成「誰も選ばずば、火にかける」

沙羅「……」

側室「殿、もうよいではありませぬか。じれったい、早く火にかけてくださいな」

側室「この女の死を、多くの者が望んでいますのよ」

沙羅「……」

幸成「これが最後だ。いかが致すか」

沙羅「おまえたちと夫婦になどならぬ」

幸成「（周りをみて）だそうじゃ」

側室「火じゃ」

側室「火じゃ」

【M15 この女に火をかけよ】

突然、使者が現れる。

家臣「幸成様！お目通し願いたいと」

身分の高い貴族が入る。

九条「ほう、趣のある庭よなあ」

勝手に進む。

九条「そこもとが眞木原幸成か」

高飛車な態度にみんながざわつく。

九条「われは九条長基。書状を持ってまいった」

幸成「はて、私は京にゆかりはござらぬが」

九条「帝からじゃ」

みな、慌てて上座をあける。

九条「こちらに香楠殿がおると耳にしたが、そなた呼んでまいれや」
家臣、しぶしぶと席を立つ。

九条がゆっくり座る。

九条「(沙羅を見て)なるほど、このおなごか……」

幸成「沙羅殿に御用向きが？」

九条「書状は海見の姫、沙羅に入内を促すものじゃ」

側室「入内ですって！」

九条「即刻、支度をされよ」

香楠入る。

九条「これは久しや香楠殿」

香楠、頭を下げる。

九条「ゆるりと旅の話など伺いたいのう。これ、私の部屋を用意致せ。ここでは落ち着けぬ」

幸成、顔で指し示す。

家臣が九条を連れて出る。

幸成「これはまいった。そなたが待っていたのはこれか。帝の嫁とはな。私の負けだ、京に上れ」

沙羅は動かない。

香楠、立ち去ろうとして止まり、沙羅を見る。

幸成「命びろいしたな」

沙羅「誰が、帝の妻になると言った」

幸成「日の本一の男だ。文句あるまい」

沙羅「顔も見たことのない男など興味はない。私が欲する男は、ただ一人」

香楠を指す。

沙羅「この男だ」

みんな驚く。

幸成「沙羅殿はそう申ししているが、香楠殿はいかに？」

香楠「この女は……、私が最も忌み嫌う女だ」

立ち上がる幸成。

幸成「火をもて」

沙羅を捕らえようとする家臣たち。

沙羅「触れるな！この身に縄をかけるなど許さぬ」

家臣が沙羅を取り囲む。

沙羅「今宵は十六夜か。それもまたよかろう。さあ、火をかけよ。そなたたちに、二度と忘れることの出来ぬ極上の美を見せてやろう」

【M 16 炎の沙羅】

火をまとい、踊り始める沙羅。

その神々しさに、みな息を呑む。

幸成は吸い込まれるように沙羅に近づく。家臣が慌てて止める。

香楠も目を離せずにいる。思わず、手を伸ばす。

笑う、沙羅。

香楠は伸ばしてしまった自分の手に驚く。

沙羅は、炎となって踊り続ける。

(赤い紙吹雪)

11 時はめぐりて

側室の叫び声。

薄明かり。

側室に火をかける幸成。

側室「熱い、熱い」

幸成「ちがう！おれが見たいのはこんなものではない」

家臣「……」

幸成「次はこいつだ！こいつにも火をつける！」

家臣「殿！もうおやめください」

幸成「離せ！女だ、女を連れてこい！もつと火を用意しろ。燃やせ！燃やせえ！」

幸成、他の側室を捕まえて火をかけようとする。

暴れる側室。

家臣がゆっくり刀を抜く。

その刀を幸成に振り下ろす。

(黒布で舞台を覆う) ※赤い紙吹雪を隠すため

焰「静かに雨はふる。埋もれた火を鎮め、大地を清めゆく」

埋火「雨は流れる。山をつたい里を潤し、流れは大海をめざす」

焰「時も流れた」

埋火「海見の血が絶えて三年。眞木原の足跡も残らない」

焰「この年、尾張に織田信長が生まれた」

埋火「日の本に風が吹く。海からおこる風が吹く」

焰「そして風は、新たな炎を作り出す」

12 絶対支配者

数人の僧が山中の小さな庵を訪ねる。

戸を叩く音。

僧「なんとしても天台座主としてお迎えしたいのです」

僧「香楠様、どうか比叡にお戻りください」

香楠は動かない。

香楠「私は座主にはなれぬ。比叡山に入ることも許されぬ身だ」

僧「香楠様！ここを開けてください」

うなだれ、帰って行く僧たち。

香楠はつぶやく。

香楠「私はもう聖ではない。もう元には戻れない」

立ち上がり、天を仰ぐ。

香楠「私は、あのとき…魔に心を奪われたのだ」

庵に生暖かい風が吹く。

力なく座り込む香楠の後ろに、沙羅が立っている。

沙羅「今宵おりしも十三夜。高き天には青の月。ふれる明かりは絹

の糸。赤い薔薇の匂い立つ」

大きな袖を広げ、香楠を包み込む。

【終】

